

圖版要項

一、粉河寺縁起 部分(原色刷) 和歌山 粉河寺藏

二、同 部分 同

紙本着色 卷子装

今春國寶に指定された粉河寺縁起は、何時の世にか火災にかかつて、はじめの部分の失い、現存する部分も前半は断爛のあといたましく、後半にも上下に焼痕をとどめている。はじめの詞書を失つたため、繪巻だけでは前半部の物語内容を明らかにすることは困難だが、醍醐寺本諸寺縁起集に收められる「粉河寺大率都婆建立縁起」や、阿婆縛抄諸寺略記の粉河寺の條などによつて、次の如き物語を畫いたものと知ることが出来る。

寶龜年中に紀伊國那賀郡に一人の狩師があり、一幽谷に踞木をもうけて、每晚猪鹿を窺つていたが、踞木に近い地面から光明を發する所があるのを見て奇異に感じ、其處を靈地として柴の庵を造つた。狩師は佛像を造りたいと願つていたが、ある日一人の童の行者が訪ねて来て寄宿を請い、彼に佛像を造ることを約し、七日間柴の庵に閉じ籠つた。七日目に狩師が庵の扉をあけると、等身の千手觀音立像がきらきらと輝いて居り、童子は姿を消していた。繪巻後半部は、詞書によつて次の如き物語を畫いたものとわかる。

河内國さらら(讚良)郡に長者があり、娘が重病にかかつて醫藥・祈禱も效なく、悲しんでいた。其處へ童行者が訪れて来て、娘を加持全快させた。長者がよろこんで種々の珍寶を施そうとしたが、童子はそれを斷り、娘の捧げる「さげさや」と紅の袴だけを受取り「われに會い度くば那賀郡の粉河に來い」と言つて去つた。長者一家は童行者の行方をたずねて草堂に至り、堂内に千手觀音が施無畏の手に「さげさや」と紅の袴を提げているのを見て、

かの童が觀音の化身であつたと知り、一家の人々は剃髪した。

いま、本誌に掲げた二圖の中單色版の方は本巻の繪第四段目で、娘の全快によつて、長者の一家が童行者に感謝してゐる場面、原色版の方は繪第五段の終末に近い部分で、長者一家が觀音の手にさげさやと紅の袴がかかるのを見て感涙にむせぶ場面である。觀音に向つて合掌禮拜するのが長者、そのかたわらに涙にむせぶのが娘とその供人であり、右方には長者の乗つて來た輿、その横の二株の樹木のうち、右の一株に横たえられるのは狩師が猪や鹿をねらつた据木である。全巻中でも彩色が最もよく残る部分で信貴山縁起に類似した畫風によつて、物語のクライマックスが巧みに表現されている。

この繪巻は古來、源氏物語繪巻などの作繪風の繪巻に對立する、所謂「動的畫風」を示す繪巻として、信貴山縁起や伴大納言繪詞に次ぐ優作とたたえられ、少なくとも鎌倉初期を下らない制作とされている。然し、この繪巻については、大和繪同好會の複製本や雄山閣發行の繪巻物集成などにより全巻の大意をうかがい、梅津次郎氏の最近の一文(「ミューゼウム」第二七號)によつてその大體を知る以外には餘り詳しい解説がない。従つて、本誌に圖版を掲出するに當つて、以下に多少の推論を試みてみよう。

粉河寺縁起については看聞御記に次のような記事がある。

A 永享六年一四三四月二十五日、自内裏粉河觀音縁起繪三司且被下。畏殊勝之繪也。自室町殿被進云々。

同 廿六日 自内裏御繪之殘四司給。粉河縁起七卷有世三段。利生揭焉殊勝也。

同 廿八日 内裏御繪返進。

嘉吉元年一四四一五月廿六日、内裏粉河縁起繪一合七写沈金被下。殊勝也。

公方被進彼御繪敷。

同 廿七日 御繪返進。

B 永享六年三月廿四日 抑禁裏詩冊事被仰下之間進之 啓蒙對初心詩 學抄和漢一座 誠太

子書一帖 花園院御作。光嚴院春宮之時。被遊進御學問事也。 此兩三帖進之。又寶藏繪三卷 粉河觀音繪 粉河觀上人繪

犬頭 糸繪 入見參。此繪有子細不出軒外。雖然依召進之。

これによれば、十五世紀中葉に（A）沈金の宮に收められた七卷本の粉河寺縁起があり、それには三十三段の利生を畫いてあつて、室町將軍から宮中に進められ、天皇は二回にわたつてそれを後崇光院に貸下げたこと、（B）七卷本とは別に、一卷本の粉河寺縁起があり、それは書寫上人繪や犬頭糸繪と共に、寶藏繪として祕藏されていたことがわかり、粉河寺に關する二種類の繪卷が存在したことが知られる。

これら二種類の繪卷のうち、先ず前者について考えると、この七卷本は、伏見宮記録によつてほぼその内容を明らかにすることが出来る。伏見宮記録は後崇光院の後裔たる伏見宮家に傳えられた寶物類に關する記録であるが、その元の二十六に七卷本「紀粉河寺縁起」並びに「粉河寺續驗記」を収録している。兩者は「後崇光院宸筆之寫」と題され、續驗記の奥書によると、寶徳四年（一四五二）三月に書寫されたものである。兩者が共に後崇光院宸筆の寫本であり、續驗記が永享三年（一四三二）將軍義教の粉河寺に對する御戸帳奉納の敬白文を以て結ばれているところをみると、これらの繪卷が、看聞御記の著者とも、又、室町將軍とも密接な關係を持つたことは確實である。従つて、伏見宮記録に見える粉河寺縁起は、看聞御記に記される七卷本と同一物で、後崇光院は永享六年と嘉吉元年に内裏から貸下げられた粉河寺縁起を、その後にも鑑賞する機を得て、寶徳四年にそれを書寫し、それが伏見宮家に傳えられて來たものと思われる。

いま、伏見宮記録によつて、七卷本粉河寺縁起の内容をみると、看聞御記が「有三十三段利生掲焉」と云う如く、粉河寺に關する靈驗や歴史の斷片を三十

三話集めて、各話に一圖ずつの繪を添えてあるが、それら三十三話の前に、更に二段の詞と繪があつて、大伴吼子古と佐大夫長者の粉河寺創建に關する物語が加わつている點が注目される。註一三十三段の利生繪以外に、二段の話が加わつていることは、看聞御記が七卷本について「有三十三段云々」と記すのと矛盾するようにも感じられる。然し（1）後崇光院が「有三十三段云々」と記したのは、七卷本のはじめの三巻を見た日ではなく、後の四巻を見終つた日であり、繪卷の最初の部分についてよりもむしろ全體の内容に對しての言葉と解せられ（2）後崇光院は、後述する如く院自身も大伴吼子古や佐大夫の話を畫いた一卷本粉河寺縁起を祕藏して居り、粉河寺創建談については熟知していたらしいから、院は七卷本に接してむしろ三十三段の利生談に興味を引かれたものと考えられる。つまり、看聞御記の記事は、伏見宮記録に見える七卷本の内容と必ずしも矛盾するものではなく、七卷本粉河寺縁起は、各卷詞繪五段ずつ總計三十五段からなり立つていたとみることが出来るわけである。

ただ、此處で不思議なことは、三十三段の利生の話はすべて和文で書かれてゐるのに最初の二段は漢文で書かれてゐることである。これら三十五段の詞は、續群書類從第二十八輯上に採録される粉河寺縁起と殆んど一致するから、後崇光院の書寫した七卷本は、續群書類從所收の粉河寺縁起と同一系統の繪卷と思われるが、群書類從では漢文と和文の混在を異様に感じたのか、第一・二段と第三段以下を別記したために、あたかも二種類の縁起のような感じを與へる。——七巻を通じて畫面に相當する部分は群書類從では全く省略され、伏見宮記録ではただ「繪」と記すのみで、各段の圖様を知ることが出来ぬのは残念である。然し、詞書を通覧すると、その内容から考えて、これが粉河寺で制作されたものであることは間違ひなく、群書類從本は奥書によつて明徳四年（一二九三）に勘解由小路入道が作つたことがわかるから、粉河寺に十四世紀末葉に七卷本縁起が存在したことは確實である。

それでは十四世紀末に粉河寺には何故漢文と和文の詞書の混在する七巻本縁起が存在したのであろうか。——此處で、われわれが當然思い起すのは、醍醐寺本諸寺縁起集にある天喜二年(一〇五四)僧仁範が記した漢文の「粉河寺大率都婆建立縁起」(梅津次郎氏が、「ミュージアム」第二十七號に紹介して居られる)や、それを略記する阿婆縛抄所收諸寺略記(福山敏男博士は「美術研究」第一五二號に於て十二世紀後半頃に作られたと推定して居られる)の粉河寺に關する漢文縁起である。伏見宮記録も續群書類従も、漢文の部分は共に仁範の縁起を踏襲している點から考えると、七巻本は粉河寺に於いて、恐らく鎌倉時代も相當下つてから、古くから寺に傳えられた漢文縁起の内容に三十三の利生談を追加して新しく制作されたものと考えることが出来る。そして、その際、詞書に漢文と和文が混在する不統一な形がとられたのは、或いは當時、寺には大伴吼子古や佐太夫長者に關する和文の縁起は存在しなかつたことを暗示するのかも知れない。

看聞御記にあらわれる二種類の粉河寺縁起のうち、次に、一巻本について考えると、その粉河觀音繪は後崇光院によつて、書寫上人繪・犬頭糸繪と共に「寶藏繪」と呼ばれている。犬頭糸繪は恐らく、今昔物語卷二十六に收められる「三河國始三大頭糸語」を題材としたものと想像され、書寫上人繪は、兵庫縣書寫山圓教寺に現存する書寫山縁起と關係あるものと思われる。書寫山縁起は性空聖人の業蹟を繪卷にした一巻本で、現在のものは十七世紀初葉の制作であるが、或いはその原本があつたかも知れず、その内容は信貴山縁起と微妙な關連を持つ繪卷である。「粉河觀音繪」が、今昔物語にみえる犬頭糸の説話畫や、信貴山縁起に關係ある書寫上人繪と共に「寶藏繪」と呼ばれたことはまことに興味ある事實といわねばならない。そして、この場合、後崇光院の言う「寶藏繪」とは如何なる意味かと言ふことが當然問題になつて来る。後崇光院

は「此繪有子細不出軒外雖然依召進之」と云つているから恐らくそれは後崇光院所藏のものと思われるが、——「寶藏繪」と共に宮中に進められた誠太子書(伏見宮家に傳えられ、宮内廳書陵部に現存する)がやはり院の所藏品だつたはずなのに、誠太子書については、何等「寶藏」の語が記されていないところをみると——「寶藏繪」とは、「後崇光院寶藏の繪」と言ふことではなく、何か別の意味を持つていたらしい。

看聞御記には「寶藏繪」の語が屢々あらわれ、中には「御室寶藏繪」「崇光院寶藏繪」「持明院寶藏繪」など特定の場所や人物の名を冠せたものもあるが、それよりも、ただ漠然と「寶藏繪」と記すだけの場合が多く、嘉吉元年五月二日の條には「寶藏繪爲由拂召寄」ともあつて、後崇光院の所藏品中に一括して「寶藏繪」と呼ばれる繪卷があつたことは確實である。應永二十三年六月十三日の條に他家の繪卷について「寶藏繪部類也」と記す個所もあるところから推すと、後崇光院の言う「寶藏繪」は、何か一群の繪卷に對する特別の名稱のように感じられる。是澤恭三氏の御示教によれば、當時「寶藏」と言う場合には御室寶藏・宇治寶藏なども考えられるが、後崇光院(伏見宮家)の家柄から推せば、蓮華王院寶藏と見るのが最も妥當だと言ふことである。若し、看聞御記の寶藏繪を蓮華王院寶藏の繪と考えることが許されるならば、蓮華王院に於いては、次に記すように、粉河觀音繪が制作されてもよい充分の事情がある。

蓮華王院の寺地はもとから觀音信仰と關係の深いところで、此處には、大治五年(一一三〇)先ず、鳥羽上皇が千體觀音堂建立を發願して、長承元年(一一三二)に落慶供養が行われ、その觀音堂は「平癒山得長壽院」と號されたが、この寺では、それ以來、同年四月に十一面觀音像十軀と十一面觀音畫像百體を供養し、長承二年三月、等身觀音繪像百體、保延元年(一一三五)四月には丈六觀音繪像百體が供養され、久安六年(一一五〇)五月には千座觀音供が行われ、仁平三年(一一五三)四月には楊柳觀音が供養されている。そして、下つ

て、長寛二年(一一六四)十一月に至ると、後白河法皇が別に新しく千體觀音堂造立を發願し、平清盛に命じて九間三間の千體堂を造らせた。それが即ち「蓮華王院」で、得長壽院に對して新千體堂と呼ばれたのである。ところが、後白河法皇は、更にもう一つ千體觀音を安置する持佛堂(小千手堂)の造營を計劃し、粉河寺から本尊千手觀音像の餘材を以て作られた三尺の像を移して、安元二年(一一七六)四月に、それを中尊とする觀音堂を供養したと言ふ。^{註二}古來おびただしい觀音畫像の供養されて來た蓮華王院の寺地に、小千手堂が新築され、その際中尊として粉河寺本尊の餘材を以て作られた觀音像があてられたとすれば、其處に「粉河觀音繪」が制作されることは極く當然のことで、^{註三}後崇光院の祕藏した「寶藏繪」は或いは蓮華王院の寶藏繪だつたとも言えるだらう。そのよゝな「觀音繪」に於いては、大伴吼子古や佐太夫長者の説話は當然收められるはずだが、それ以後の粉河寺に關する三十三段の利生談は必ずしも必要でなく、七卷本であるよりは、むしろ一巻本である方が好都合だつたように思われる。

以上、看聞御記にあらわれる「粉河觀音緣起繪(粉河寺緣起)」七卷と「粉河觀音繪」一巻について考えた結果、およそ次のようなことが想像される。

- 1、粉河寺に於いては、天喜二年(一一五四)に仁範によつて「粉河寺大率都婆建立緣起」が作られ、それには大伴吼子古と佐太夫長者の粉河寺創建期の説話などが漢文で記されていた。
- 2、粉河寺に於いては、恐らく鎌倉後半期に至つて、創建期の漢文の説話に三十三段の利生談などが加わつて七卷本粉河寺緣起が作られたらしい。
- 3、一方、蓮華王院に於いて、安元二年(一一七六)後白河法皇の持佛堂建立の頃に、粉河寺觀音繪一巻が制作された可能性がある。

さて、右の如き考察を前提として、翻えつて、現在の粉河寺緣起一巻につい

て考えると、どのようなことが言えるだらうか。

現在の粉河寺緣起繪卷は大伴吼子古と佐太夫長者に關する説話を畫いているが、詞書は漢文でなく、卷初を失つた現狀に於いても、繪五段詞四段に及ぶから、これが七卷本第一巻の詞二段、繪二段に相當しないことは明瞭である。又、この繪卷の詞と、漢文緣起を比較すると、漢文緣起では、吼子古は童行者が作つた十一面觀音に唯一人歸依して他人に知らせなかつたことになつてゐるのに、繪卷では、獵師は家に歸つて家人に語り、近隣の人々にいふらして各各參詣歸依したることになつて居るし、漢文緣起では、佐太夫は童行者に鞘と帶とを贈つたことになつてゐるのに、繪卷では「さげさや」と朱の袴を贈つたことになつてゐる。仁範の漢文緣起とはやや相異するところがあり、説話的興味を加わつてゐる。従つてこの繪卷は、犬頭糸繪や書寫上人繪と共に寶藏繪として傳えられた「粉河觀音繪」一巻に近いように思われる。

然し、此處で問題になるのは、看聞御記の粉河觀音繪は一巻であつたが、現在の粉河寺緣起繪卷は、もとは二卷本だつたらしく、看聞御記に記す一巻本と果して同一物かどうか、考慮の餘地があることである。——即ち、紀伊續風土記には、この繪卷について

此緣起は吼子古の粉河寺を草創せしより、河内ノ國の郷豪佐太夫といふ者觀音の靈驗を蒙り、粉河に來り一家出家して觀音に仕へまつるまでを畫き、その間に事書を加へて、二の卷物としたるなり。詞もやや古めき書も宜く、畫も俗ならず。然れども、何れの時の回祿にかかりしにや、初の卷は燒失せて、次の卷の今遺りたるも卷の上下燒爛れて全からず。

と記して、もと二卷であつたことを斷言している。紀伊續風土記は天保十年(一八三九)の編纂で、比較的新しい書物であり、繪卷について「何れの時の回祿にかかりしにや」と言うくらいだから、もと二卷であつたと言ふ説も、どれほど信じてよいか疑問である。然し、現在の繪卷自體について検討すると、次

に述べるように、右の記事は必ずしも一概に却けるべきではないことが判明する。

この繪卷は全長が六丈四尺六寸二分七厘もあつて、繪卷としては異常に長く、卷末に（畫面の完結したあとに）二紙分の餘白を残している。その二枚の白紙のうちあとの一紙は最後から第三紙（畫のある最後の紙）と金銀泥で刷かれた霞が、相互に直接連続しているのに、最後から第二紙には霞のあとがなく、この紙は改装に際して、別の場所から現位置に移動されたものと見ねばならない。繪卷全卷を通じて、この紙の入るべき場所を求めると、吼子古に關する第一話が終り、佐太夫に關する第二話の詞が始まるところが、繪卷の構成上からも構圖の上からも最も都合で、恐らく其處に入るものと推定される。秋山光和氏の御厚意により試みに同氏の寫真により問題の白紙を切斷した上、推定位置に移動して顕微鏡でしらべて見たが、それによると、問題の白紙の皺と第一話の最後の白紙の皺とは連続するものがあり、連続せぬ皺は、現位置に於いて最後から第三紙の皺と連続していることが認められた。従つて、第一話と第二話の間に、もとは、現在卷末から二枚目にある白紙が存在したことはほぼ確實である。そして、問題の白紙をその位置に置いてみると、第一話の最後の部分と、第二話の最初の部分では、後者の方がかなり紙にいたみを感じられ、この繪卷は古くは大伴吼子古の話巻を第一巻、佐太夫長者の話巻を第二巻とする卷本であつたと考えられる。

それでは、この繪卷は何時一巻本に改装されたのだろうか。現在この繪卷が上下に甚だしい焼痕をとどめていることは前述した通りだが、その焼痕から推せば、繪卷は罹災前に既に一巻本になつていたはずである。粉河寺舊記には元和二年（一六一六）十月金堂焼失のこと、元和九年（一六二二）「南龍公繪卷修復」のことが見えるが、徳川頼宣（南龍公）が紀州家の基礎をひらいたのは元和五年（一六一九）七月で、彼は紀州公になると同時に、紀伊の社寺と種々の關係を

持つたのだから、元和九年の繪卷修復は必ずしも、元和二年罹災のためとは考えられない。繪卷の罹災が、もしも、その頃のことなら、紀伊續風土記にも「何れの時の回祿にかかりしにや」と言うような漠然たる書方はしなかつたであろう。又、粉河寺に現存する元祿十六年（一七〇三）の奥書ある模本によつても、原本は當時既に巻初を缺いていたように思われる。従つて、罹災は、或いは、粉河寺舊記に「天正十三年（一五八五）豊臣秀吉の兵火により金山回祿」と言われる時に當てるのが、妥當なのではなからうか。

もし、そう考えることが出来るならば、この繪卷が一巻本になつたのは、天正十三年以前と言ふことになり、看聞御記の一巻本「粉河觀音繪」と同一物と見る可能性も多くなつて來るわけである。そして、この繪卷の第一話で觀音堂のかたわらに繰返し畫かれる意味あり氣な木材（餘材？）も面白く解釋されるわけである。然しながら、粉河寺の十一面觀音に對する信仰は、平安・鎌倉・室町の各時代を通じて相當盛んだつたから、緣起繪卷の制作も、わずか一・二にとどまつたはずはなく、現在粉河寺や國立博物館に傳えられる數種の模本や異本から考へても、なお幾多検討すべき餘地が残されている。梅津次郎氏はこの繪卷全體にも模本的性格が感じられることを指摘して居られるが、これも注目すべき問題であり、その他にも後考をまつべき點が少なくない。今はただ看聞御記にあらわれる二種類の繪卷の記事を手掛りとして、粉河寺緣起について略考し、現存する繪卷は、何れかと言へば、同書の「粉河觀音繪」の系統に屬すように思われると言ふことを記すにとどめよう。（大串純夫）

註一 但し、七卷本は、第一段の詞のはじめの方にかなり缺失した部分がある。

註二 「吉記」安元二年四月二日の條に

法住寺殿内建立九間三面御堂事

二日 丁丑 天霽 今日院法住寺殿内東南山上建立九間三面精舍一字美作守

臣安置 千手觀音像云々。

願文、俊經朝臣草之、權中納言忠親卿清書之(下略)とあり、伏見宮記録と續群書類從所收の粉河寺縁起卷五「後白河法皇御願干手堂中尊因縁第廿一」に、

法皇(後白河)は五代帝王の父祖として萬機諮詢の歲月をつむ 人民を濟し佛法を崇たまふ其を本とせり 中にも千手千眼の靈德を尊び給て三十三間乃御堂を建てられたり 又小千手堂を作りて千鉢乃觀音を安置せらる 件中尊ハ本願孔子古の採し所の御曾木なり残りて當寺にあるを後の人ありて三尺の像を造立す 法皇聞食て奉迎りたまふ 安元二年四月二日に供養せられける御導師は賢覺僧正也 左大辨藤原俊經卿願文奉て草せられけり 其文に曰、

抑於三尺像并二十八部衆者非全新功也 己爲舊像 尋其本源 出自粉河昔獵徒忽逢靈童 靈童教以造像之趣 獵徒間有服膺之心 入山中以伐光耀之

木 就木下以結方丈之菴 童子住其菴暫令其閉其戸 限一七日爲雕刻之期 獵徒至期開戸見之 只有化像不見靈童 仍以其化像永爲本尊 所伐之靈木殘而在此寺 後人取彼靈木 又刻千手觀音 千時同抽寸棘共造廿八部衆 効驗惟新 星霜多積 弟子聊有由緒 幸得傳持每思因縁之不淺 有渴仰之尤深 今當安千體於一堂 即以此尊像爲中尊而已 となる。

(なお、後白河法皇と密接な關係をもつた平康頼の著書「寶物集」中に、諸所の觀音と共に、粉河の觀音に關する記事があるから、それによつても法皇をめぐる人々が粉河の觀音に親近感を持つていたことがわかる。)

註三 粉河寺縁起の前半に繰返し畫かれる觀音堂の傍には、意味あり氣な木材(餘材?)が認められる。

詞書

(繪)

さて七日といふにくたんの所にゆきてミ

れハすこしふんもたかすあけたるとこ

ろもなしさてあけてみれハ等人におハ

ます千手觀音一體きらく

いりしをきた

せすきな

てつもなしれうしあ

このよしをめにかたりてうちくしつ

まいりきんへんのものともこのよしを

いひちらしてをの〜まいり歸依した

てまつけり

(繪)

河内國さらゝのこほりに長者ありけ

りたたひとりもちたるむすめミ

みかきのことくはれてし

てくさゝかきりなかりけ

りてすゑて三年かあひ

なはてあるほとにこの長者のいゑにわらハ

りていはくまことにやさふらふらむこのとの

ひみきみのよにいみしきやまひをして

しぬへくおはしますときこゆるは

らは七日はかりいのりまいらせ

いふ長者よろこひていは

ひたおほくの僧達を

まなくいのれともかなはねハすてをきた

にかくのたまふよにうれしき事なりとく

いのらせたまへとてあつけたれハこのわら

まくらかみにあて千手陀

てゝひまなくいのる

いのるにしたかひてう

身やみもてゆく七日といふつとめて

さハ〜となりてうちをきてあたりちハま

ひいてこのわらハにむかひてこハいかなるほとけの

法量 全長 6丈4尺6寸2分7厘
縦 1尺 1分

—(第一話)—
尺 15.155
(最後より)
第6紙 1.685
" 5 " 1.685
" 4 " 1.690
" 3 " 1.685
" 2 " 1.685
" 1 " 1.670

—(第二話)—
第1紙 1.680
" 2 " 1.685
" 3 " 1.690
" 4 " 1.690
" 5 " 1.680
" 6 " 1.685
" 7 " 1.690
" 8 " 1.680
" 9 " 1.685
" 10 " 1.685
" 11 " 1.685
" 12 " 1.695
" 13 " 1.680
" 14 " 1.685
" 15 " 1.690
" 16 " 1.680
" 17 " 1.690
" 18 " 1.690
" 19 " 1.685
" 20 " 1.677
" 21 " 1.690
" 22 " 1.665
" 23 " 1.400
" 24 " 0.91

25.255

64.627

39.372

わたり給ひてかくハいのりいけさせ給つるそといひて
くらをひらきて七珍萬寶
童のまへにはねいたすをミテ 我
する身にはあらずたゝひとへに
治しかたき病をいやし人のね
とのミかまふる身にてあるなりさらん〜ほしからず
とてたゝいてにいて給へハむすめなく〜まへにひれ
ふしてわかきみハほとけにこそおはしますめ
れ衆生のねかひをみつるとおほしめして
をさなくよりみもはなたすもちて
候とてさげさやひとつくれな ぬ
らすといへハそれも無益なりされ
るゝ事なれハとりつさても〜君はいづくに お

ますにかと申せハぬところいつくとさためたること
なしされともこひしくおハしまさむにハまいり 候
はむといへハ我は紀伊國なんかのこほりに粉河と
いふ所にはへるなりといひていて〜お は
みれはくらゝとうせぬ
(繪)
つきの年の春一家をくしておの〜さう
して紀伊國なんかのこほりにたつねゆ
きぬその邊にいつれか粉河々々とする
人にとへともおほかたをしふる人
まれやまなかにこそおはします
ふもとにつきてたつねありくほとにこそす り
ていれたるやうなる河のしろきなかれいてたる

ありそれをよろこひて河につきてかみさ
まにのほりてゆくほとにふかくいり
方丈なる菴室ありそれまで人
たるあとみゆそのをくにハあとた
こそありけれとおもひてあけてみ れハ
白檀の千手観音きら〜とたちたまひたり
この我まいらせし袴さげさや施無畏の御手
にさけたまへりそのをりしりぬ千手観音の
わらハとなりて人をたすけ給けるな
れうしか一家件の粉河乃別 當
いたるまでなりきたるなり

(繪)

若し第一話・第二話が各一卷
ずつであつたとし
第二話第23紙が第一話最末
にあつたとすれば

第一話は全長 26.675尺

第二話は全長 37.972尺

となる。
そして若し、第一巻と第二巻
がほぼ同じ長さであつたと假
定すると、第一巻は12.297尺
即ち約12尺缺失していること
になるわけである。